与　謝　野　晶　子

～情熱の歌人・与謝野晶子～

48期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

歴史で学んだ与謝野晶子は、僕の住んでいる堺市出身の人です。晶子は生きている間に約５万首もの歌をつくりました。また、彼女の書いた歌集は、大きな反響を呼び、現在も、この歌集は多くの人に読まれているそうです。なぜ、そんなに人気があるのだろうか、また、彼女は、どのような一生を送ったのか、ということを知りたい、と思い、このテーマに設定しました。

Ⅱ　研究方法

(1)　文献調査　　与謝野晶子に関係のある資料を集め、彼女に対する知識を深める。

(2)　現地調査　　堺市内には、彼女の生家跡や歌碑があるので、実際に行ってみる。

Ⅲ　研究内容

1　与謝野晶子の生涯

(1)　与謝野晶子の主なできごと

1878　12月７日、堺市の「駿河屋」という和菓子屋に生まれる。

1891　区立堺女学校（現在の大阪府立泉陽高校）を卒業し、補修生として残る。
　　この頃から、父の蔵書の古典類を読みあさる。

1898　読売新聞ではじめて、与謝野鉄幹のことを知る。

1900　機関誌「明星」に短歌がのる。
　　講演のために関西にきた鉄幹にはじめて会う。

1901　単身、上京する。
　　歌集「みだれ髪」を発表する。
　　鉄幹と結婚する。

1904　「明星」に「君死にたまふこと勿れ」を発表し、歌人大町桂月に非難される。

1912　「新訳源氏物語」を発表する。
　　鉄幹のあとを追い、ヨーロッパへわたり、５ヶ月後に帰国する。

1916　「新訳紫式部日記・和泉式部日記」を発表する。

1921　文化学院を創立し、学監となる。

1922　「新訳徒然草」を発表する。

1935　３月、鉄幹が病死する。享年62歳。

1939　「新々訳源氏物語」が完成する。

1942　５月29日、病死する。享年64歳。

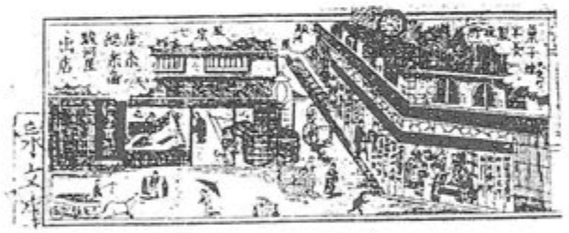
(2)　幼少の頃の晶子

晶子は、前にも書いた通り、堺市の和菓子屋に生まれました。彼女の生家「駿河屋」は、ようかんで知られた和菓子屋で、開店したのは、天保年間頃だそうです。だから、その辺りでは、かなり名の知れたお店でした。

晶子の父親はとても教育熱心だったので、早教育を望み、4歳で彼女を宿院尋常小学校へ入れました。が、まだ幼なすぎたため、恐怖心をおこして、登校をしぶるようになったため、6歳になって、改めて入学させました。そして、小学校を卒業後、新しく創設された、堺女学校に入学しました。そして、3年の修業年限を終えると、補修生として、学校に残り勉強を続けました。しかし、上の姉は嫁にいき、下の姉は病弱なため、12，3歳の頃から店番をしなくてはいけなく、忙しいときには、学校を休まなければならなかったのです。店番をしているときには読書をしたため、晶子は、読書に夢中になり、自分の読書歴について、

わたしは夜なべの終わるのを待って
夜なかの12時に消える電灯の下で
両親に隠れながらわずかに
1時間か30分の明かりを頼りに
清少納言や紫式部の筆の跡を
偸(ぬす)み読みして育ったのである

というくらい、本を読みあさったので、店の者達から、「お嬢さんは本の虫ですね」と笑われるほどでした。



▲図1　明治16年頃の駿河屋

(3)　鉄幹と晶子

晶子が鉄幹のことを初めて知ったのは、1898年（明治31）4月10日の読売新聞の短歌欄ででした。その後、鉄幹は、師の支援のもとで、1900年（明治33）、機関誌「明星」を創刊しました。鉄幹は、別の機関誌で晶子の歌を読み、その才能を認めていましたので、知人を通じて、晶子に投稿を呼びかけました。それに応じて投稿した作品は、「明星」第2号に掲載されました。その後、1900年8月、「明星」の拡大運動を兼ねて、関西に来た鉄幹に、晶子は、初めて会いました。この鉄幹の関西滞在期間、11日の間に2人は5度も会っています。しかし、他にも数人いつもいたため、2人だけで会う、ということはありませんでした。

鉄幹に会ったあと、晶子は心を鉄幹にひかれていきます。その心境を読んだものが、次に出てくる「みだれ髪」です。そして、1902年（明治35）1月、2人は結婚しました。（写真1）

▲写真1　結婚して間もない頃の鉄幹と晶子

▲写真2　歌集「みだれ髪」が発表された頃の晶子

▲写真3　歌集「みだれ髪」表紙

(4)　みだれ髪

1901年（明治34）8月に、歌集「みだれ髪」が発表されると、文学界だけでなく、世間にまで大きな反響を呼びました。なにしろその頃は、男女が連れだって歩くのさえ、けがらわしい、と見られた時代だったので、女性が恋の喜びを歌いあげるのは、まさに、罪悪にも等しかったわけです。人々は、この歌集の出現に眼もみはらんばかりでした。しかし、若者達は熱狂して、この歌をむかえました。晶子は、自分の気持ちを誰かに伝えたくて、この歌を読んだのだと思います。それとも、今までの古い考え方ではダメだ、これからは新しい考え方でなくてはいけないのだ、と思いながら読んだのかもしれません。どちらにしても、このように、自分の気持ちを素直に表現できる彼女には、すごいな、と感心させられました。

(5)　君死にたまふこと勿れ

あゝをとうとよ　君は泣く
君死にたまふことなかれ
末に生まれし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までを育てしや

で始まる各8行5連の詩「君死にたまふこと勿れ」が発表されるやすぐに、常に「明星」と対立している機関誌「太陽」の歌人、大町桂月が激しい非難を加えました。この詩が発表されたのは、1904年（明治37）、日露戦争のまっただなかの時です。天皇や国のために死ぬことが、その頃の日本人の最大の名誉、と考えられていた当時の社会で、大きな反響を呼び起こし、晶子は非難の矢面にたたされてしまいました。

▲写真4　弟の鳳　籌(ちゅう)三郎

▲写真5　歌人大町桂月

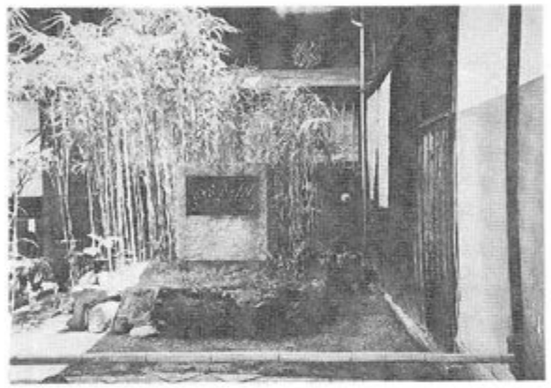
しかし、晶子は、“まことの歌”をうたったのだ、と主張しています。もし、僕がそ

の頃の人であったとしたら、きっと彼女と同じ考えを持ったことでしょう。だから、他にも彼女と同じように考えた人が大勢いたはずです。その人達全部を代表して、戦争反対の気持ちを素直に表現したんだと思います。そして、彼女は、とても勇気があるな、と思わされました。

2　与謝野晶子歌碑めぐり

堺市内には、歌碑が11基あります。その中のいくつかを紹介したいと思います。

(1)　覚応寺（阪堺電鉄阪堺線神明町下車、東へ200m）



▲写真6

▲写真7
河野鉄南

その子はたち　くしにながるる
くろかみの　おごりの春の
うつくしきかな

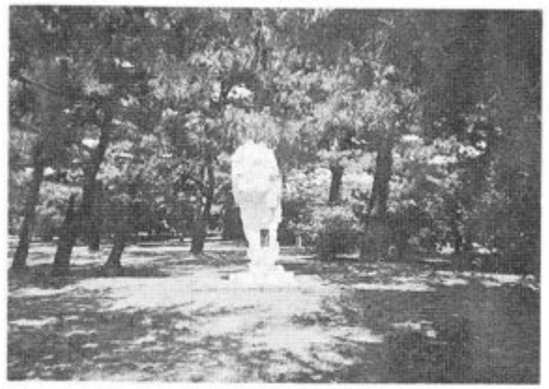
この歌碑には、この歌が読まれています。ここのお寺の、先々代住職さんは河野鉄南という人で、晶子のことを鉄幹に紹介したのはこの人です。また、その後も、鉄幹夫妻とは、歌を通じ、親しかったそうです。つまり、この人は、歴史的に結構重要な人物といえるでしょう。このお寺周辺は、戦災をまぬがれたため、古い建物が建ち並んでおり、歴史が感じられました。

(2)　泉陽高校（南海高野線堺東駅下車、徒歩５分）

▲写真8

この歌碑には、「君死にたまふこと勿れ」の歌が読まれています。ここは、前にも書いた通り、晶子の卒業校です。だから、晶子に関係したことをやっているらしく、僕が見学に行ったときも、研究会のようなものが開かれていました。この学校は、とても植物が多く、緑のしげったこの学校は、とても気持ちが良かったです。

(3)　浜寺公園（阪堺線浜寺公園前下車、公園の正門を右に曲がる）

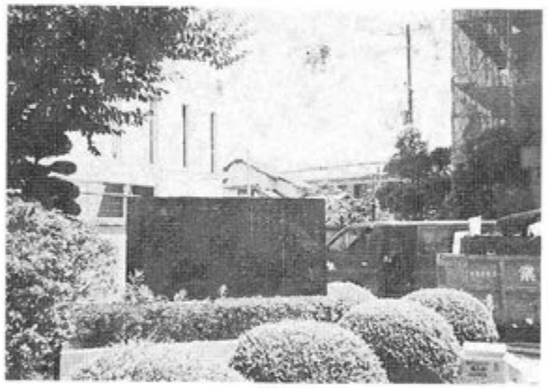


▲写真9

ふるさとの　和泉の山を
きはやかに　浮けし海より
朝風ぞ吹く

この歌碑のある浜寺公園は、講演のために来た鉄幹と晶子のデートしたところだそうです。この碑の形は、そのときに読んだ「わが恋をみちびくほしとゆびさして君ささやきし浜寺の夕」のゆびさしてのイメージをデザインしたものだそうですが、はっきりいって、よく分かりませんでした。真の芸術とは、とても難しいものだなあと思います。

(4)　堺女子短期大学（ＪＲ阪和線浅香駅下車、西へ５分）



▲写真10

山の動く日

山の動く日きたる、かく云へど、人これを信ぜじ。山はしばらく眠りしのみ、その昔、彼らみな火に燃えて動きしを。されど、そは信せずともよし、人よ、ああ、唯だこれを信ぜよ、すべて眠りし女、今ぞ目覚めて動くなる。

この詩は、女性解放を求めて、晶子が読んだものです。この詩のあるこの学校は、現在、工事中だったのですが、女子校ということもあり、自由に見学できるのですが、やはり少しは緊張しました。この碑は見てきた中で、一番大きく、文字もビシッとひきしまり、色も黒っぽいあい色だったので、とてもかっこよく、落ち着いた感じがしました。この高校を出たあと、駅に向かう途中にあったタコ焼き屋さんは、結構おいしかったので、一度行って見てはどうでしょうか？

他にも堺市内には、生家跡、西本願寺堺別院、堺市民会館、堺市立中央図書館、堺市大仙公園、羽衣学園短期大学、堺市甲斐町の道標があるのですが、全部紹介できなかったので、とても残念です。あと、話はずれるのですが、２人のお墓は、東京都の府中多摩霊園にあり、今も静かに眠っています。

Ⅳ 結　論

晶子は、歌・古典・女性問題などのいろいろなことをしてきました。そして、それをほぼ成功に結びつけました。また、「みだれ髪」や、「君死にたまふこと勿れ」などを読み、人々に大きな反響を与えましたが、晶子は“まことの心”を表現したのだ、と言いました。また、歌でもその気持ちを表現しました。僕は、堺の11基ある歌碑の中の４基を紹介しましたが、それは、ほんのひとにぎりにすぎません。北は北海道、南は鹿児島、また、フランスのパリなどと、世界にまで晶子の歌は知られています。歌は数えると、５万首をこえる、といいます。その５万もの心を持った生き方に、心をとりこにされた人達がたくさんいます。その生き方はきっと、いつまでも受けつがれていくことだと思います。まさに晶子は“情熱の歌人”といえるでしょう。

Ⅴ 総　括

歴史というものは、調べれば調べるほど、いろいろなことが分かってくるので、すごいなあ、と思います。だから、歴史のことをいろいろ研究している人は、今まで知られていないような新しいことを次々と発見できるのだから、うらやましい、と思います。今回は、何かを研究する、ということは初めてだったし、テーマを決めたあとも、本当に調べれるのかなあ、と不安でしたが、資料をいろいろ調べたり、歌碑を見学に行ったり、とかなり時間はかかったけど、結構楽しかったので、次回も楽しめるように、がんばりたい、と思っています。

◦参考文献

・吉田　三郎（1990）与謝野晶子歌碑めぐり全国版　二瓶社　191Ｐ
・入江　春行（1985）与謝野晶子　新潮社　111Ｐ
・伊藤　次夫（1992）国語資料総覧　吉野教育図書株式会社　187Ｐ
・岡本　恵年（　？　）最新重要人名事典　受験研究社　244Ｐ
・内山　邦男ほか（1981）日本の歴史人物ものがたり・下　旺文社　382Ｐ